



【基調シンポジウム】

「阪神・淡路大震災の経験を人と動物の幸せな未来へ
— 護るべき大切な日常とは? 」

「ヒト・動物・自然の新たな公共性の模索—文化比較の視点から」

小原 克博 氏

同志社大学 神学部 教授 / 良心学研究センター センター長

○位田 それではまず、最初のスピーカーをおねがいたします。同志社大学の小原先生にお願いをいたします。

○小原 今、御紹介にあずかりました同志社大学の小原です。私から、今日「ヒト・動物・自然の新たな公共性の模索」というテーマでお話をさせていただきます。[\[スライド1\]](#)

この会議の目的は、全ての生き物のケアを考えるということですね。これは非常に壮大なテーマだと思います。人によっては荒唐無稽と思えるかもしれないぐらい、壮大なテーマです。しかし、私はこのことをしっかり受けとめていく必要があると思いますし、人間が人間のことでだけではなくて、全ての生き物のケアを考えるためには、私たちの考え方のフレームワークそのものを変えていく必要があります。きょうは、それに少し役立つような話ができればと考えています。

最初に、私が今日どういう話をしたいかをざっと見てみておきます。公共性という言葉はちょっと難しいと思いますが、決して難しい話ではないんだということを最初に説明します。その後、きょうのテーマの一つである文化比較について話します。日本における動物観及び西洋やキリスト教世界における動物観を比較する中で、私たちはこの公共性の基盤、動物を見るときにも私たちならではの見方もあります。しかし、そうではない見方も合わせ見ると、より広い共通基盤を見出していきたいと考え

ています。[\[スライド2\]](#)

1. 公共性と動物観

最初に、公共性と動物観について話します。

[\[スライド3\]](#)

そもそも公共性とは何なのか、これはちょっと難しく、倫理学とか政治学とかいろんな分野で定義の仕方があるんですが、今日はそういう話はしません。[\[スライド4\]](#)

私たちは日常生活の中で、「私たち」と呼べる範囲の人たちとそうでない人たちを無意識のうちに分けています。参考までに聖書の一節を挙げておきましたけれども、隣人愛が大切だということはおおむね了解されると思います。「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の言葉がありますが、実際に人類は全ての人を隣人として等しく愛してきたかという、全くそうではありません。自分たちに近い、例えば家族あるいは親戚、地域社会に住む人々ぐらいまでは隣人として愛する対象、「私たち」として呼べる範囲です。ところが、それ以外の人たちに対しては特別な愛を施す必要はないという形で、ある種の境界線を引っ張ってきました。ですから自分と同じ、例えば人権とか尊厳とかを与えることができる対象、その共同体のことを「道徳的コミュニティ」と言いますが、この境界線はしばしば変わってきました。we とそうではない境界線は時代とともに変わってきたわけです。ごく最近の典型的な例の一つだけ紹介してみたいと思います。



先月、6月26日にアメリカの最高裁が画期的な判決を下しました。これは全米で同性婚を認める判決でした。結婚、家族、愛ということをめぐる、実はこの10年、20年、アメリカは非常に激しい議論をしてきました。パブリックな世界では、異性愛、つまり男性と女性が愛し合うことが標準だったんですね。ですから、例えば20年前であれば、同性愛者同士が結婚することをパブリックな場で許すことは到底考えられなかったわけです。ところが、さまざまな変化の中で大きな決断がなされて、もちろん今も議論は残っているんですけれども、結婚という、つまり結婚を認めることは福利厚生であるとか、税制上の優遇であるとか、そういったものを社会的に承認していくことなんですけれども、そういった形で同性婚もパブリックに属するものとして境界線が変えられていくんですね。この問題にこれ以上立ち入りませんが、最初に皆さんに投げかけておきたい問いはこういうことです。パブリック、あるいは「私たち」という境界線は強い意思と運動があれば変えることができるということです。これを最初に提起しておきたいと思います。[\[スライド5\]](#)

公共性や「私たち」という概念規定は拡張もし、そして場合によっては縮小もします。隣人全てを愛することができればいいんですが、実際のところは、隣人とそうではない人たちを無意識のうちに分けてしまっています。これが人類の歴史的な現実ですね。

私たちは日常の中で無意識のうちにさまざまなものを排除してきています。私たちの愛の対象ではない、ケアの対象ではないということで排除してきているのですが、一体、何を排除してきたのかを考える必要があります。

この人たちは隣人ではないということを、さまざまな形で正当化してきました。例えば白人中心の社会の中では、黒人は自分たちと対等に

扱う必要はない。場合によっては奴隷制度も必要なんだ。こういう長い人類の歴史があるんですね。レイシズムです。

それから男性中心的な社会では、女性は男性と別に対等でなくてもいいじゃないか。女性は女性の役割があるんだから、家庭にいて、かくかくしかじかのことをしてもらいたいんじゃないかというような、そういった性別役割分業も正当化されてきました。

あるいは、宗教によって差別がされてきたという歴史も長くあります。セクシズムとかレイシズムが境界線を正当化してきたんですね。人間の中ですらさまざまな境界線が引かれて、**we**と言えるような範囲は極めて限定されてきたわけです。

それから、境界線の中には、胎児とか、胎児の場合は中絶の問題にかかわってきますけれども、脳死患者がいます。この境界線の議論は非常に大事ですが、人間社会におけるこういう議論のらち外に置かれてきたのが、動物とか自然の存在です。人種の差、性別の差、さまざまな問題、今も残っていますけれども、**we**と呼べる、あるいはケアすべき対象としてこれまで考えてこられなかったのが動物や自然であったのではないかということです。これについては後ほど、日本の場合、西洋の場合に分けて見ていきます。

ここで最初の問いに戻りますが、公共性をどこまで拡大できるかです。狭く設定することもできます。しかし、動物や自然にまでその感覚を広げていかなければ、この会議がテーマにしているような、全ての生き物のケアを考えるとすることは到底できません。私たちの極めて人間中心的な、あるいは自分の関係中心的なその社会構造を変えていく必要があります。

さまざまなケアの対象外がありますが、もう一点つけ加えておけば、私たちは意識するとせずとにかかわらず、現代の世代のことだけ



を考えています。未来世代のことは視野に入っていないんですね。しかし未来世代、つまり将来の、例えば日本社会とか世界が持続可能な社会として存続していくためには、やっぱり動物と人間の関係を根本的に考え直す必要があります。でなければ、持続可能性は保障されません。ですから、ここで考えておきたいのは私たちの公共性の中に、あるいは、**we** という感覚の中に、動物や自然を入れる余地があるだろうか。あるいは自分たちのことだけではなくて、将来の世代のことも考える余地を生み出すことができるだろうか。そのことを今日はぜひ考えていきたいと思います。

未来世代を考えることに関して、こういう問いを考えることもできます。私たちは未来世代に何を残すことができるのかということです。皆さん、考えてみてください、何を残すことができますか。確実に残せるようなものを幾つか挙げるすることができます。十分に二酸化炭素の濃度が増加した大気。あるいは十分に化学物質が蔓延した社会。今では、南極洋においてすら人口化学物質を見出すことができます。そういうさまざまなものを私たちは後世に間違いなく残すことができますが、いずれ負の遺産です。

ここにおられる方々は、恐らく一番、経済的には豊かな時代を生き、そしてそれを享受してあの世に行くことができます。つまり逃げ切ることができるんですよ。皆さんが残した負の遺産を次の世代は引き継ぐことになります。50年後とか100年後、地球の大気温が3度や5度上がったところで、私たち知りませんと言えるのかどうか。これは責任の問題にかかわってきます。ですから、**we** という範囲を自己中心的に設定するならば、未来世代のことも動物のことも見えてきませんが、果たしてこれでよいのかということですね。

今日のテーマである公共性とか動物と人間の関係に関して、非常にラジカルな問いを突き

つけた人を2人だけ紹介しておきたいと思います。

アルベルト・シュヴァイツァーという人が、まずその一人です。彼は「生への畏敬の倫理」を考えました。「私は生きんとする生命にとりかこまれた、生きんとする生命である」という、これはまさにこの会議の趣旨にぴったり合うような彼の結論です。なぜ彼がこういう結論に至ったかということ、この会議が阪神・淡路大震災という悲劇から生まれたように、シュヴァイツァーは第一次世界大戦の悲劇を経験しました。彼自身、捕虜になって戦争の悲劇を目の当たりにしたんですね。ヨーロッパの国々はキリスト教国です。ですから、隣人愛に基づいて、本来ならば愛し合ったり和解し合ったりしなければならぬのに、血で血を洗うような大きな戦争を行いました。なぜそんなことになったのかをシュヴァイツァーは考えました。そして、彼がたどり着いた一つの結論は、西洋社会にある人間中心主義です。人間が偉いんだという、この人間中心主義が結局、戦争にまで行き着いたと彼は考え、人間中心主義を相対化するために、人間だけではなく全ての命は等しく尊いという哲学が人類にとって必要だということを目指しました。彼は人間中心主義ではなくて、生命中心主義を考えるきっかけを与えることになります。[スライド6]

そしてもう一人は現役のプリンストン大学の先生ですけども、ピーター・シンガーという世界的に有名な倫理学者がいます。彼が1975年に出した *Animal Liberation* という本が世界に大きな影響を与えました。『動物の解放』として日本語にも訳されている書物です。ここで、ピーター・シンガーはある存在が苦しみをを感じる限り、その苦しみを考慮しないことは道徳的には正当化できないと主張しました。つまり、人間が自分の利益のために動物を犠牲にするような態度、これは性差別や人種差別と同じ



ように、倫理的には正当化できないとして、彼はそれを「種差別」と呼びました。これは全く新しい英語ですけれども、speciesism という新しい言葉をつくって、種の差によって差別をすることはできないと訴えていきます。このあたりの議論が蓄積されて、西洋における動物愛護運動とか動物福祉運動の思想的な基盤を与えています。[スライド 7]

昨今問題になってきました、クジラの問題、イルカの問題。日本からすれば、何か批判されてばかりという思いがするかもしれませんが、実はこういったところに議論の発端があります。非常に高度な神経系統を持ち、つまり人間と似た喜怒哀楽を持っているようなクジラやイルカ、あるいは非常に高度なコミュニケーションを持っているそういった生物を残酷な方法で殺すのは倫理的には正当化できないという議論の蓄積が西洋社会にはあります。ですから、そういったロジックを知らないで、「それは文化的な差別だ。日本には固有の食文化がある」という形だけでやり合っていたのでは、この問題は解決しません。ですから、西洋における議論も私たちは視野に入れていく必要があります。

動物を考えるときに、私たちは目の前にいる伴侶動物、ペットとしての動物のことを考えることが多いですが、人類と動物のかかわりは非常に長いものがあります。[スライド 8]

私は宗教を専門としている者ですけれども、人類の歴史と宗教の歴史はほぼ同じぐらいの歴史があります。何か儀礼をするとき、例えば超越的なものに祈願したり、雨乞いでも何でもいいんですけれども、祈願するとき、何もなしでは人間は超越的な存在に語りかけることができませんでした。何か特別な仲介者が必要であったということです。その仲介者としての役割を果たしたのが、何十世紀にもわたって、動物でした。動物をささげてきました。仲介者と

して人間と超越的な存在の関係を取り持ってきたのが動物であったので、宗教とは何かを人類史的に言うならば、それは動物供犠、動物を犠牲にささげることだということになります。

今日は時間がありませんので、細かいことはお話しできませんが、私が日本の動物観を参考にするときによく読む本が、中村生雄さんのものです。彼は動物観を2つに分けて、まとめています。西洋等の狩猟文化を中心にした「供犠の文化」と、日本のような「供養の文化」として彼は整理しました。「供犠の文化」の中では動物の命を奪ってそれをささげます。動物を殺して、それを神にささげることによって願いを聞いてもらうということで、それは一神教の伝統の一部反映されています。日本の場合には、殺す場合もあるんですけれども、ささげるといふより、神と人がその動物や穀物をもとに食するという文化があります。つまりそこでは神と人との連続性が前提にされています。日本や東アジアの多神教的な文化の中にこういったものが見られます。[スライド 9]

2. 日本文化における動物観

次に、少し具体的に日本文化における動物観を紹介してみたいと思います。[スライド 10]

まず前提となるような、日本における動物観の思想的なルーツについてお話をします。中国を含む東アジア一帯では、先ほど言いました、動物を犠牲としてささげるような動物供犠が比較的中心でありました。例えば、中国の古典にも多く残っていますが、雨乞いをする必要性はどここの国でもありました。農耕社会においては雨が降るか降らないかは死活問題でしたから、必死でお祈りをするんですけれども、その際、動物をささげます。動物の血を滴らせて、それによって祈願をすることもありました。その文化は、日本にも一部受け入れられますが、日本ではそれは形を変えました。動物を殺すの



ではなくて、むしろ捕まえていた動物を放生する。捕まえていた命を野に戻すんですね。あるいは、もうこれ以上殺してはいけないよということで、殺生禁断令のようなものが日本では出されました。その背景としてあるのは、仏教到来が大きなインパクトを与えたのは当然ですけれども、それ以前にあった動物観の上に、仏教の輪廻思想や不殺生の考え方が強く作用したということです。[スライド 11]

輪廻と聞くと、子供じみた考えだと思いかもしれません。しかし、輪廻思想は動物観を考える上では大事です。小学生のころを考えてみてください。私の場合はこういうことよくありました。教室での会話で「生まれ変わるんやったら何になりたい?」とか、「勉強したくないから猫がいいかな」とか。自分は、今は人間けれども、次は何になりたいか、といった話をするわけです。ひょっとしたら次は犬になるかもしれない、猫になるかもしれない、その前は虫であったかもしれないということを考える中で、「命の等価性」を学ぶんですね。目の前にいる動物は、自分と形は違うけれども命として等しいんじゃないか、そういったことを暗に考えるきっかけになります。

命をむやみに奪ってはいけないというアヒンサー (ahimsa) の考えは、ヒンドゥーに由来する、インドの中心思想の一つですけれども、不殺生という考え方が日本文化に強く作用してきました。人間の命と自然の命と動物の命は別々のものではなくて、根源においてつながっているという理解が日本の自然観や動物観の基盤として存在しているということです。

その例をごく簡単に動物供養ということを通じてお話をしたいと思います。いくつか写真をお見せします。

最初のもは、山口県にある長門向岸寺というお寺でずっとされているクジラ供養です。山口県は和歌山と並んでクジラ漁で有名なとこ

ろで、この向岸寺では、人間とほとんど同じようにクジラの位牌をつくり、さらに鯨鯢過去帳という過去帳もつくっています。どこでどういふ大きさのクジラをとって供養したということが書かれています。今も毎年、クジラ供養がなされています。クジラ漁をした人たちは、母子のクジラには人間と同じような強い母子愛があることを知っていました。その命を奪うことに強い罪責感を持つ中で、クジラをとるだけでなく、供養するという文化が育っていきました。[スライド 12]

クジラほど大きくないですけども、地上においてもう一つ大きな存在としてクマがいます。この写真にはヒグマが写っています。これはアイヌの有名な儀礼の一つ、イオマンテです。ヒグマを狩猟した際に、自分たちが生きるためにお肉はいただくけども、クマの霊は神々の世界に帰っていただくということで、非常に丁寧にその儀礼をするんですね。そうすることによって、人間が一方的にこのヒグマとか動物の命を奪うのではなく、命のやりとりをしているということを生活の中で経験をしていっているわけです。[スライド 13]

こういうクジラやヒグマのような大きなものだけではなくて、こんな供養まであります。皆さん読めますね。「しろありやすらかにねむれ」という碑文が記されています。シロアリのような非常に小さいものに対しても、その命を奪うことに対して罪責感を感じている人たちがいるということです。この碑は誰が建てたのでしょうか。日本しろあり対策協会といってシロアリを殺して、みずからの生計を立てている人たちです。家を守るためにはシロアリ駆除は大事です。しかし、その駆除する中でそれを申しわけないということで、こういう供養をしています。これは高野山にあるんですけども、高野山はことし空海が高野山にお山を開いてから1,200年という非常に大きなお祭りをしてい



るところですが、たくさんあるお墓の中の一つにこういったシロアリ駆除のものがあります。

【スライド 14】

しかし、京都の曼殊院というお寺にはもっとすごいものがあります。ちょっと見えにくいですが、「菌塚」とあります。菌です。ジャームです。顕微鏡でしか見えないものです。でもそれを供養しないといけないと思っている人たちがいるんですね。日々菌を犠牲にして成り立っているビジネスがあります。誰もが知っている有名な製薬会社が建てた碑です。新薬を開発するときにはたくさんの菌を使います。その菌を犠牲にすることに対しての罪責の念を日本人は感じてしまうということです。一般的に言うと、この感覚はまったく科学的ではないと思います。しかし、供養しないと何か心がおさまらないという感覚が日本にはあるということでしょう。【スライド 15】

もう一つ、日本的なものを紹介したいと思います。ケンタッキーフライドチキン、これはグローバルなフランチャイズ企業です。世界のどこに行ってもマクドナルドと並んでケンタッキーフライドチキンはありますが、おそらく、ただ日本においてのみ行われている行事があります。これチキン供養祭です。アメリカやヨーロッパのケンタッキーフライドチキンは、このような行事はしません。写真でわかるように、これ神道式ですね。神官が来てチキンの供養をしています。ケンタッキーフライドチキンは、たくさんのニワトリを売って巨大ビジネスにしているわけですから、こういう供養には自己正当的な側面があり、倫理的には問うべき点があると私は思いますが、いずれにしても日本では供養したくなるような心の感覚があるということがわかります。【スライド 16】

今まで示した事例は現代的なものでしたけれども、古典的なものを最後に示しておきたいと思います。これは有名な鳥獣戯画、あるいは

鳥獣人物戯画と言われるもので、昨年、京都国立博物館でこの実物が展示されました。学校の教科書にも必ず載っている有名なものですから、ぜひ見たいと思って、私も京都国立博物館まで、ふらっと出かけました。ところが想像以上の人気で、何と入ってから鳥獣戯画までたどり着くのに3時間もかかりました。たどり着いても、係の人から足を止めないようにと急かされますので、実際に見たのは30秒くらいでした。しかし、それでも実物を見て、大きなインパクトを受けました。ウサギや猿やカエルが人間のように描かれている大きな絵巻物です。京都の高山寺で、12世紀から13世紀に書かれたものが集められて複数巻の絵巻物にされています。鳥獣戯画は日本の漫画のルーツになったとも言われています。つまり、ここからもわかるように、鎌倉時代においても、人間と動物の間にはあまり大きな隔てがなかったということです。ウサギやカエルが、人間と同じような遊びをしても、それが全く違和感なく受け入れられていた文化があったということです。

【スライド 17】

画面右の写真にある木彫りの犬は、鳥獣戯画の展覧のときに同じ場所で展示されていた、高山寺の「子犬」です。これは高山寺をつくった明恵という方のお墓の隣の禅堂にずっと置かれていた、鎌倉時代に作られた木彫りの子犬です。この子犬の周りには、仏教の立派な教典も多数ありましたが、私の目は、この木彫りの子犬に釘付けになりました。こういうものを見ると、明恵上人が犬を非常にかわいがっていたということがわかります。動物と人間の近さを鳥獣戯画や高山寺の子犬は伝えていました。【スライド 18】

そういうユニークな文化がかつてあったわけですが、それが現在も同じような形で存在しているかということ、違います。そこも考える必要があります。日本の近代化、これはズバリ言



うと富国強兵ですが、国を豊かにし軍事的に強い国になろうとする中で、かつてあったような自然観がどんどん失われていきます。昔は動物と自然は共生する関係でありました。動物と人間が会話をしたり、結婚をしたり、仲間になったり、そういう日本の昔話はたくさんあります。人間と動物は確かに完全に対等なわけではありません。しかし、動物を犠牲にしなければ人間は生きていくことができないという痛みと感謝を覚えるような回路をかつては持っていたわけです。ところが、技術力の進展、産業化、近代化の中でこういった動物と人間の中にかつてあったような共生関係が大きく失われ、今は動物を一方的に犠牲にして成り立っている人間中心の社会になっていっています。日本社会もその例外ではないということです。

3. 西洋(キリスト教)文化における動物観

次に、西洋キリスト教文化における動物観に入っていきたいと思います。[スライド 19]

いろんな考え方が西洋にもあります。しかし、主流となるものは一つです。日本と違って西洋キリスト教社会では魂を持っているのは人間だけです。動物に魂はありません。ですから、魂がないものを道具的に使っても、倫理的には問題ではないということです。そういったことがさまざまな記録に残っています。そうではない議論もありますが、いずれにしても動物に魂があるのかどうか、権利があるのかどうかという議論の蓄積が西洋社会にはあります。また後で紹介しますように、今日では「動物のための礼拝」という新たな取り組みもされてきています。したがって、西洋社会では一般的に人間中心主義で、シュヴァイツァーが批判したような人間中心主義が確かにあるのですが、その西洋においても近年大きな変化が生まれてきています。[スライド 20]

キリスト教というと、私たちは一般的にヨー

ロッパのキリスト教、西方のキリスト教のことをイメージすると思いますが、キリスト教の伝統は大きく言うと西方と東方、つまり、カトリックやプロテスタントの西方の伝統と、ギリシャやロシアの東方正教会の伝統があります。ロシアの伝統はトルストイやドストエフスキーのようなロシア文学の中に色濃く反映されています。ロシア文学の中で有名なものの一つにドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』があります。この文章の中には、西洋キリスト教には見られないような動物に対する愛情が見られます。「動物を愛せよ。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ」といった言葉がゾシマ長老の言葉として記されています。[スライド 21]

「動物を愛せよ。かれらには神が思想の源と、平安なる喜びとを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。苦しめてはならぬ。かれらから喜びをうばいってはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない」とも記されています。動物に十分配慮せよ、神がそうしてくれているんだから、そうしなさいと語っています。[スライド 22]

キリスト教世界の中から、今日の動物福祉運動あるいは動物愛護運動の起源を見出すこともできます。最も早いものの一つが、1824年にアーサー・ブルームという英国国教会の司祭が設立し、今もイギリスにおいて非常に重要な役割を果たしている王立動物虐待防止協会です。ブルームはキリスト教の司祭として隣人愛を語りますが、この愛を人間だけではなく動物にまで広げていかなければならないと主張しました。[スライド 23]

日本で言うと、1915年に新渡戸稲造の妻であるメアリー夫人らが中心になって、日本では初めての動物愛護団体としての日本人道会が設立されています。この時期に似たようなもの



が他にもできており、転機を迎えていましたが、直後に戦争が始まり、これらの運動は残念ながら長続きはしませんでした。しかし、20世紀初頭に日本人道会など、動物福祉に関心を持つ人々の運動が始まっていたことは記憶しておいてよいと思います。

西洋における最近の変化も紹介したいと思います。西洋のキリスト教は「祝福」は、元来、人間が人間に対してするものでした。ところが近年、Animal Blessing といって、司祭が犬などの動物に祝福を与えることも見られるようになってきました。[スライド 24]

それからもう一つ、動物礼拝の様子を紹介します。

[スライド 25/ビデオ上映]

説教の中で司祭が、聖フランシスコがなぜ動物を愛したのか、と会衆に問いかけていました。その後、動物を祝福する儀式が行われていました。連れられてきた動物に対して司祭が聖水をかけていました。動物は嫌がっているように見えてましたが、飼い主からすれば、清めてくれる、祝福してくれることは、ありがたいでしょうね。こういったフランシスコ会系の教会では、聖フランシスコの精神に基づいて動物礼拝をするところが増えていきます。動物礼拝は、フランシスコの誕生日である 10 月 4 日や、その前後の日曜日にすることが多いですが、最近は毎月動物礼拝をして、動物と人間の間を関係を考え直す教会も出てきています。[スライド 26]

「動物の神学」というものもあります。これはかなりラディカルな発想を含んでいます。先ほど紹介したピーター・シンガーのような動物解放論者は動物と人間の間を差を設けることは種差別だと批判し、種の間を平等性を主張していました。しかし、英国のアンドリュー・リンゼイのような「動物の神学」の立場に立つ人にとっては、それだけでは不十分です。リンゼイは「弱者が道徳的優先権を持つべきである」

と述べ、人間よりもむしろ動物のほうが優先されるべきだということまで言い切っています。これが正しいかどうかは別にしても、こういう新しい考え方が出てきているのは興味深いです。動物愛護先進国の英国ならではの議論です。[スライド 27]

4. 結論

結論を述べたいと思います。[スライド 28]

この会議のテーマは「全ての生き物のケアを考える」ということです。このテーマにしっかりと向き合うためには、人も動物も自然も視野に入れたような **we** の考え方、公共性を考える必要があります。そして、私たちの日本の文化や動物観を大事にしなければなりません、それだけではなくて、今、示しましたように、西洋にある取り組みや変化を理解しながら、偏狭な文化ナショナリズムに陥らないように動物に対する見方を広げていく必要があります。そのような作業の中で、グローバルな公共性、あるいはコモン・グッドを見出していかなければなりません。[スライド 29]

日本は非常にユニークな動物観、自然観を持っていました。ところが、それは急速に失われつつあり、今私たちが持っている人間と自然、あるいは人間と動物の付き合い方は、他の国と大きくは変わらなくなっています。近代化された公共意識、つまり現代の生きている人間の利益を最大化することをよしとする価値観が圧倒的な力を持っています。もちろん私たちは人間ですから人間中心的にしか生きることができません。将来の世代のことよりも、今の自分の生活が大事です。しかし、過剰に人間中心的でもなく、過剰に現代世代中心的でもないような公共性を緩やかに広げていくことができないでしょうか。これが問いであり、課題です。

最初に、LGBT の例を挙げました。強い意思と運動があれば公共性は変えることができま



す。we という枠組みを変えることはできます。今、私たちは近代的な毒性に侵されて極めて人間中心のすけども、それを自覚して変えることができるのならば、we の中に動物も自然も入れて、そしてこの会議の主たる目的である「全ての生き物のケアを考える」ことを実現可

能な課題として、私たちは受けとめることができることになります。

私の話はこれで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。



ヒト・動物・自然の新たな公共性の模索 — 文化比較の視点から —

A Quest for a New Form of “Public”
among Human-being, Animal and Nature

同志社大学 小原 克博

Katsuhiko KOHARA, Doshisha University

スライド1

Overview

- 公共性と動物観 Understanding of the “Public” and Animals
- 日本文化における動物観 Animals in Japanese Culture
- 西洋（キリスト教）文化における動物観
Animals in the Western (Christian) Culture
- 結論 Conclusion

スライド2



1

公共性と動物観

Understanding of the “Public” and Animals

スライド3

公共性とは何か？ What is the Public?



道徳的コミュニティ
The Moral Community

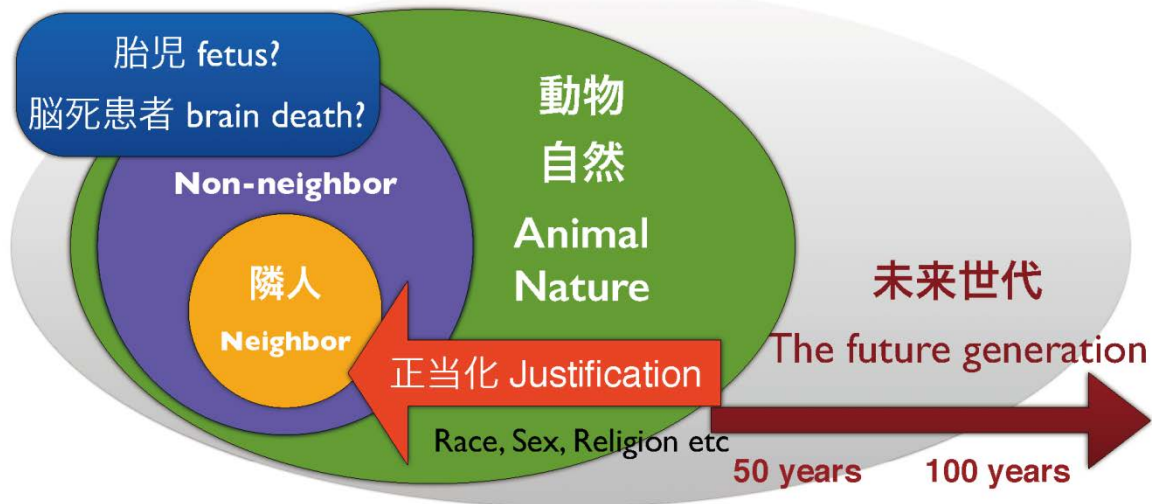
隣人を自分のように愛しなさい。
(マタイ 22:39)

Love your neighbor as your self.
(Mt 22:39)

スライド4



公共性の拡張（縮小） The Expanding (Contracting) Public



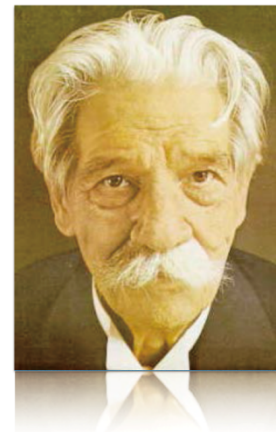
スライド5

Albert Schweitzer (1875-1965)

- 生への畏敬の倫理 (ethics of reverence for life)
「私は、生きんとする生命にとりかこまれた
生きんとする生命である」という事実 (『文
化と倫理』 (著作集第七巻) 311頁)

The most immediate fact of man's consciousness is the assertion "I am life that wills to live in the midst of life that wills to live."

- 生命中心主義 (biocentrism) の先駆者的役割
を果たす。

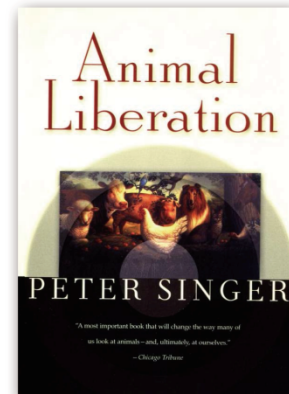


スライド6



Peter Singer (1946-)

- 『動物の解放』 *Animal Liberation*
- 種差別 speciesism
- 動物保護運動 (animal welfare movement) の思想的基盤を与える。



The first edition, 1975
The fourth edition, 2009

スライド7

媒介としての動物 Animals as a mediator

- 超越的なもの（世界）と人間をつなぐ媒介としての動物（穀物）
- 人類史的な尺度から見ると、動物供犠^{くぎ}（Animal Sacrifice）を中心とする犠牲の祭儀（供犠）が「宗教」そのものであった。

スライド8



供犠の文化

Culture of Sacrifice

- 犠牲獣 (victim) の破壊を通じて神が顕在化。
- 殺す文化
- 神と人の非連続性
- 一神教文化

供養の文化

Culture of Commemoration

- 神 (々) との共食 (動物・穀物) を通じて神が顕在化。
- 食べる文化
- 神と人の連続性
- 多神教文化

【参考】 中村生雄 『祭祀と供犠——日本人の自然観・動物観』
法蔵館、2001年

スライド9

2

日本文化における動物観

Animals in Japanese Culture

スライド10



- 東アジア一帯で行われていた祈雨等のための動物供犠が日本では姿を消し、反対に放生^{ほうじょう} (release of animals) や殺生禁断令 (the ban to kill animals) が、その目的のために採用された。
- 仏教以前の土着的観念の上に、仏教的な輪廻思想 (reincarnation) と不殺生 (ahimsa) が作用した。
- 人間のいのちと動物のいのち、自然のいのちは根源においてつながっていると理解されていた (アニミズム的生命観 the animistic view of life) 。

スライド11



動物供養の事例

Memorial Service for Animals

whales



スライド12



brown
bears



スライド13

termites



スライド14



germs

スライド15

KFCでは、毎年、関係者が一堂に会して、鶏への感謝と供養のために「チキン感謝祭」を執り行っています。東日本の関係者は東京に、西日本の関係者は大阪に会して実施しております。
KFCでは、おいしく安全で健康的なチキンをお客様にご提供するために、たくさんの関係者が日々、情熱をもって取り組んでいます。
大事に育て、丁寧にカットし、安全に店舗に届け、1ピースずつしっかりと手づくり調理するKFCのオリジナルチキンは、1羽1羽、大切に扱われて、おいしいフライドチキンとなっているのです。
チキン感謝祭は、その関係者が一堂に会して、鶏に感謝するとともに供養する祭事です。



The Memorial Service for Chickens by KFC, Japan

スライド16



鳥獣人物戯画（鳥獣戯画）（高山寺、12-13世紀）
Scrolls of Frolicking Animals, 12-13th century

スライド17

動物と人間の「対称性」の崩壊 Losing a balance between animals and humans

- 日本には、動物と人間の共生を語る昔話が多数存在する。人間と動物は会話をし、結婚し、仲間となる。人間が動物を犠牲にしなければ生きていないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていた。
- 技術力の進展による、動物と人間の「対称性」の崩壊、そして動物の家畜化。



高山寺の「子犬」（鎌倉時代）

スライド18



3

西洋（キリスト教）文化 における動物観

Animals in the Western (Christian) Culture

スライド19

動物観の変遷 Changing Views of Animals

- 動物の「魂」(soul)や「権利」(rights)をめぐる議論の蓄積 【理論】
- 西洋キリスト教では、伝統的に魂は人間の専有物として考えられてきた。In the Western Christianity, only humans have their souls.
- 動物の「魂」をめぐる議論の歴史は長い。
 - 池上俊一『動物裁判』（講談社現代新書）1990年。
 - 金森 修『動物に魂はあるのか』（中公新書）2012年。
- 動物のための礼拝（1970年代以降）Worship for Animals 【実践】

スライド20



東方キリスト教における理解

- 【参考】ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（原著1880年）におけるゾシマ長老の言葉 *The Brothers Karamazov by Dostoyevsky*
- 兄弟よ、人々の罪過を恐るる勿れ。罪過のただ中にある人間を愛せよ。なぜなれば、これはすでに神の愛にあやかるものであって、地上における愛の頂上にほかならぬからである。ありとあらゆる神の創造物を、全体としても、はたまた各部分としても、なべて等しく愛するがよい。一枚の木の葉、一条の日の光をも、もれなく愛するがよい。**動物を愛せよ**。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ。一切の事物に愛をそそぐならば、そこに神の秘密を発見するにいたる。（続く）

スライド21

而して、ひとたびこれを発見したからには、もはやその後は毎日、毎時、毎分、いよいよますます、たえずその認識を深めるようになるであろう。かくてついに、完全無欠な、全世界全人類的な愛によって、この世を光被するにいたる。**動物を愛せよ**。かれらには神が思想の源と、平安なる喜悦とを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。苦しめてはならぬ。かれらから喜悦をうばいとはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない。かれらはすべて罪過なき存在であるが、これに反してわれわれ人間は、偉大な稟体を具備しつつも、おのが出現によって大地を腐敗させ、その腐爛せる足跡を、あとにのこしてゆくのである。ああ、嘆かわしいかな！ われわれはほとんど各人みな然りである！

スライド22



動物愛護運動の先駆者たち

- 1824年、アーサー・ブルーム Arthur Broome（英国国教会の司祭）らが王立動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）を設立。キリスト教の慈愛の精神が、動物にまで拡充されることを願った。
- 1915年、日本人道会の設立。メアリー夫人（新渡戸稲造の妻）らが中心になった動物愛護運動の先駆。後に戦争により活力を失っていった。

スライド23



スライド24



St. Francis Church, Hoboken, NJ

スライド25



Saint Francis of Assisi

「小鳥への説教」
(ジョット、1305年頃)
Sermon to the Birds by Giotto

スライド26



「動物の神学」の一例 Animal Theology

「我々が動物にたいして義務をもっているという道徳的には満足すべき解釈は、ある動物解放主義者によって勧められているような、動物をも同等に考えるべきであるという主張に単に留まってはいただけないのである。イエスの人格によって示されている神的愛という考えに基づいて私は次のように提案する。すなわち、弱者と無防備なものは同等なのではなく、より大きな考慮を与えられるべきである、と。弱者が道徳的優先権を持つべきなのである」（A.リンゼイ『神は何のために動物を造ったのか——動物の権利の神学』教文館、2001年、64頁）。

スライド27

4

結 論

Conclusion

スライド28



- ヒト・動物・自然の関係を再構築するためには、それらを同時に視野に入れた「公共性」の意識が必要。
Seek the “public” among human-being, animal and nature.
- 文化ナショナリズムに陥らずに、動物観・自然観の比較を行い、グローバルな「公共性」（コモン・グッド）を探求する。
Continue an inter-civilizational quest for the global public/ common good.
- 近代精神に規定された「公共性」、すなわち、**現代世代（ヒト）の利益を最大化**することを前提とした「公共性」を批判的に検証し、過剰に**人間中心的でもなく、現代世代中心的でもない「公共性」**を再発見・再解釈する必要がある。Do it in the neither too anthropocentric, nor too contemporary-generation-oriented way.